

米国から見る日本気象界の開国

木田 秀次*

日本の最近の実質的な経済成長がどれほどのものかよく分らないが、円高のせいで、米国から見た日本の成長には驚くべきものがある。私が約2年前にプリンストン大学/GFDLの訪問研究者として米国に来た頃は、まだ1ドル約250円程度であったのが、今では、おおよそ約150円になってしまった。その結果、相対的に日本人の所得は米国人のそれと並ぶか幾分上まわるといって一大転換が起こっている。

この経済上の相対的關係の変化は、今後の日本（の気象界）に質的な影響を与えるに違いない。その最も単純明解な例は、米国人を特別扱いせずとも日本人並みの待遇でやとることが可能になったことである。一時的採用な直さら容易であろう。「繁栄の国」日本を訪れるをよしとする人が今後米国の中に増えてきたとしても一向に不思議でなからう。ただし、人はパンのみにて生きていくわけではないから、日本で人生のたとえひと時を過ごすにも、それ相当のもう少し高等な魅力が日本（の気象界）にそなわっているかどうかが問われることになるだろう。その意味では、厳しい評価が待っている。なにはともあれ、自動車屋さんやラジオ屋さんのせいで、日本（の気象界）は国際化の大きな反射波をまともにかぶらざるを得ないようである。

以上のことを個人的私的なレベルで言うと、現在米国に滞在し米国起源の所得を得ている日本からの訪問研究者（気象分野に限ると数名程度）は、相対的に低所得の国で働いていることになる。こういうことは、日本の歴史の中でこれまで誰れが言い得たであろうか、感がいすら覚える。今や、日本からの訪問研究者にとっては、経済的魅力以外の魅力を米国に求めているということになり、その点で、日米間の競争関係がより高等な部分に重点が移ってきたと思われる。つまり、どちら向きに人が流れるかで、文化の質の将来性が競われるということ

である。

ところで、米国の気象系大学院に属する日本人大学院生の数が増えつつあるらしいことも注目すべき現象の一つである。過去においてなら、そのまま居続けて米国の戦力になってしまおうところであるが、今ではその事情が違ふ。日本が米国と並ぶだけの国情に成長してきたこともあって、帰国して働きたいと思う若い人が多いだろうと考えられる。「国際化」が国民的標語になっている現在、彼らの果たし得る役割には十分期待でき、日本としても彼らを必要としているのではないだろうか。研究能力の点では学位によって保証されていると思われるし、彼らは、英語にも強く、また色々な国の人達との交際を通じて日本や日本人のことを客観的に見る目をもっている。これら2条件は、日本の国際化にとっての必要条件に数え上げられながらも、残念ながら多くの日本人に共通して欠けているものである。最近の経済成長は、米国育ちの若手日本人研究者をつくらせていると同時に帰国をうながす力にもなっている。しかし、彼らの帰国を受け入れる体制面では、まだまだ日本側におくれがある。

さて、話しを元にもどすが、前述のごとく、待遇や研究設備の両面ではほとんど米国にそん色なくなっているのであるから、日本（の気象界）は、第一線の外国人研究者を長期の訪問研究者として迎える制度を今以上にとのえる必要があるのではないだろうか。そして、そういう人達に、日本の地で、世界の福祉に貢献できるような創造的研究の成果を上げてもらえればどんなにか結構なことかと思われる。もちろん、日本人が日本独自の研究成果を上げて行くことも大切にならなければならない。しかし、この独自性をきたえてみかき上げるためにも、異質なものと触れ合う努力が必要であり、人的交流に重点をおいた国際化が必須ではなからうか。

好むと好まざるとにかかわらず、日本の昨今の経済成長は、これまでの日本に見られた研究の「保護」政策をつきくずす気配と見受けられる。そして、創造力のある

* Hideji Kida, 気象研究所

研究者なら、国籍を問わず歓迎されるような時代が意外と早くやってくるのではないかと、夏休み中でひと気の少ない大学のキャンパスを歩きながら、ふとほほをつね

るのである。

(1987年7月、プリンストン大学にて)

講演企画委員会からのお知らせ

大会プログラム編成方法の一部改定について

現在、気象学会大会のプログラム編成は次の方法で行われることになっています。

1. 発表者が申し込みの際に「希望分野の分類」の中から1分野を選ぶ。
2. 講演企画委員会は、発表者の希望に従って、各セッションに各発表を振り分ける。

しかし、研究分野の多様化と講演数の増加とともに、以下の問題点が生じています。

1. 新しい研究テーマの中には現行の分類項目のどれにも該当しないものがある(例:「惑星大気」)。
2. テーマによっては、該当する項目が2つ以上存在する。そのため、ほぼ同じテーマの発表が複数のセッションへ分散して申し込まれる(例:「ヒートアイランドの観測的研究が「気候」「接地境界層」「局地循環」などへ)。
3. 申し込み件数の極めて少ない分野がある(例:「気象測器」)。
4. 各セッションの講演数は、時間的條件(1セッション3~4時間)にある程度制約される。

これらの理由により、発表者の希望を完全に満たすことは不可能あるいは不相当と考えられる場合があり、講演企画委員会が発表者の希望を適宜調整せざるを得ないのが実状です。

講演企画委員会では、上記の問題点に対応し、より柔軟なセッション編成を可能にするため、申し込み要領を一部改定したいと思います。具体的には、「希望部門の分類」を「内容の分類」(仮称)と改め、申し込み要領を右記(下線部)のように変更することを考えていま

す。

記

「内容の分類」は下記の中から該当するものを選んで記入する。講演企画委員会はこれを参考にしてセッションを編成する。

自由大気現象

- | | |
|------------|-----------------|
| 1-1 気象力学 | 1-2 中小規模現象 |
| 1-3 総観規模現象 | 1-4 大気大循環 |
| 1-5 中層大気 | 1-6 熱帯気象・台風 |
| 1-7 気候 | 1-8 <u>惑星大気</u> |

(小気候は含まない)

境界層の大気現象

- | | |
|----------------|-------------|
| 2-1 接地境界層 | 2-2 エクマン境界層 |
| 2-3 局地循環 | 2-4 大気汚染 |
| 2-5 <u>小気候</u> | |

大気物理・化学

- | | |
|-----------|--------------|
| 3-1 エアロゾル | 3-2 雲物理・積雲対流 |
| 3-3 放射 | 3-4 大気化学 |
| 3-5 大気電気 | |

その他

- | | |
|-----------------|-------------------------------|
| 4-1 応用気象 | 4-2 <u>観測・解析・数値計算手法</u> |
| 4-3 <u>気象教育</u> | 4-4 <u>その他(該当する分類項目のないもの)</u> |

最終的な改定案の決定、および将来のプログラム編成作業の参考にするため、会員の皆様からのご意見をうかがいたいと思います。上記の案、その他現行のプログラム編成方法について、自由なご意見をお寄せ下さい。

あて先 〒305 茨城県筑波郡谷田部町長峰 1-1

気象研究所 予報研究部内
講演企画委員会(藤部文昭)